

医学教育ニュース (第 46 号)

特集:カリキュラムワークショップ 平成 27 年 11 月 4 日 発行

編集 久留米大学医学部教務委員会 広報活動委員会

「新カリキュラムのためのワークショップ開催」

山木 宏一 (解剖学講座 肉眼・臨床解剖部門 教授)

はじめに

久留米大学では過去にもカリキュラム作成にあたり、作成前後にそのカリキュラムのためのワークショップを行い、その提言をもとに、新カリキュラムを完成させている経緯があります。今回は新カリキュラムが第 1 学年においてスタートしているという状態ではありますが、第 2 学年以降が未完成な状態のためこのワークショップに多くの先生に参加していただき、これからの十年あまりの久留米大学医学部の医学教育を支えるものにしていただきたいという思いでワークショップ開催に至りました。

新カリキュラムの方向性

このカリキュラムは 2023 年以降の ECFMG 受験者は、国際的な基準で認証評価を受けた医学部の出身者に限るとの発表を受けて、日本医学教育学会が日本医学教育認証評価評議会を発足し、世界医学教育連盟のグローバルスタンダードに準拠した基準を作成して、医学教育の認証評価を行うことになったために全国の医科系大学ではカリキュラム改正が進められています。既に東京医科歯科大学や新潟大学などの数校が認証評価トライアルを受けていま

す。そこで ECFMG の受験は別として久留米大学医学部の教育レベルがグローバルな視点で、より高いものをめざして努力し、近い将来認証評価を受審するためにも、医学部が一丸となって進めて行かねばならないと考えています。

久留米大学医学部医学科の教育カリキュラムの作成にあたり、久留米大学 医学部医学科は「地域医療の良き担い手となる人間性豊かな医師の育成にあたり、高水準の医療および最先端の研究を推進する人材を育成すること」を教育目的としています。この目的を使命として、その達成のためのいわゆる卒業学習成果 (卒業アウトカム) を設定し、さらに学習アウトカムの構成要素と順次性のある年次あるいは科目ごとの修得内容を設定しています。

この OBE (Outcome-based education) をもとに、久留米大学医学部医学科の各学年の学習アウトカムを作成し、独自の新カリキュラム (いわゆるラセン型カリキュラム) を作成することが必要であるといえます。

ワークショップ

平成 27 年 7 月 4 日に当日限りの新カリキュラム

平成 27 年 11 月 4 日

のためのワークショップを開催しました。実行委員長は私、山木宏一が、副委員長には安陪等思教授(全体討論司会)、中村桂一郎教授にお願いしました。

午前9時から医学部長、教務委員長および実行委員長の順に挨拶があり、9時15分からこのカリキュラム改正にあたっての全体討議が45分(司会：安陪等思教授)ありました。

10時10分からテーマを4つに分けて、グループ討論が行われました。その各テーマは次のようになります。

- 1) テーマ1 「第1学年・第2学年のカリキュラム」
- 2) テーマ2 「第3学年・第4学年のカリキュラム」
- ①グループ 基礎臨床を含めた、研究室配属について (Research Mind Cultivation Program)
- ②グループ 基本的臨床技能の取得について (OSCE)
- ③グループ 現行のPOCDの改善のための方策
- 3) テーマ3 「臨床実習(クリクラ)カリキュラム」
- 4) テーマ4 「第1学年から第3学年までの体験実習」

約2時間のグループ討議のあと、今回は新しい企

画で、ランチョンセミナーを計画し、講演者は本年から新しくできた医学教育研究センター長の神代教授に「分野別認証受審にむけて」というタイトルで講演をお願いしました。講演は30分間でしたが、これから新しいカリキュラムを作成するためにも、貴重な内容でまた受審に向けても大切な所を講演していただきました。

午後もそれぞれのテーマおよびグループで90分間の討議がなされ、14時40分から約1時間の全体討議が行われました。最後に教務委員長に総評していただき、医学部長のご挨拶で、全日程を終了しました。

わずか1日だけのワークショップでしたが、各テーマにおいても全体討議も含めて活発な討論がなされ、有意義なワークショップであった印象を持ちました。また、この新カリキュラムが今回参加していただいた教職員および学生のみならず多くの方々によって完成されて行くものと確信しています。

終わりにあたり、今回のワークショップに参加あるいはご協力いただいた全ての皆様に感謝申し上げます。

カリキュラムワークショップ「第1・第2学年のカリキュラム」に参加して

内藤 嘉紀(病理学講座 講師)

平成27年度に開催されました教育ワークショップ「第1・第2学年のカリキュラム」に参加をさせて頂きました。本ワークショップは医学生・教職員が意見を出し合い、質の高い医学教育を目指す事を目的としています。教職員に対して物怖じしない発言が出来る久留米大学の校風があればこそできたことだと思います。今回も期待を裏切る事なく有意義な討論が展開されました。

多くの討論がなされましたが、私の印象に強く

残ったのは新しいカリキュラムで実施されている「1時限50分」についての議論でした。時間短縮の理由の一つとして集中力の持続時間が挙げられ、既に第1学年で実施されています。多くの教職員と医学生は概ね快く受け入れているようでしたが、「2時限連続の講義がある」、「スピードが速すぎて理解が追い付かない」など学生側から多数の問題点が挙げられました。一方で、教職員からは「充実した講義を目指している」、「時間が少な

平成27年11月4日

い分は自主学習を取り入れてください」という意見が出されましたが、教職員側の立場としては「講義時間短縮に対応した内容の検討」が必須である事がより明確になりました。

また、講義コマ編成についての討論も白熱しました。特に、医学生最大の関心事である「総合試験」についてです。特に総合試験と進級判定、各科試験の関係性に関心が高く、教職員からは日程を含めての検討案も提示されました。しかし、

教職員は一貫して「勉強したものが進級する」という明確なものであり、「総合試験」の導入による影響を精査する必要があると感じました。

医学教育は表立った成果が出にくい領域ですが、大学が担う重要な役割の一つです。医学生と教職員が作り上げていく医学教育で育った医師が、広く活躍するのを期待するばかりです。

「カリキュラムワークショップに参加して」

三好 寛明（病理学講座 助教）

7月に行われたカリキュラムワークショップに参加させていただきました。私は約5年半前に久留米大学に参りましたが、今回は2回目の参加になります。参加させていただくたびに非常に強く感じます事は、「久留米大の教官の先生方は学生への愛情が深い」という事です。ワークショップの際に常に意識されているのは、「限られた時間の中でできる限り質の高い教育を受けられるようにしてあげたい」という点であり、今回のワークショップでは「世界水準に到達できるような教育を受けてもらうため

のカリキュラム」を作成するための熱い議論が交わされました。優秀な人材は大学の宝であり、そういった人材を育てるための学生教育をいかに成功させるかということは、久留米大学医学部の将来を占う必要な命題だと思います。教官の先生方の熱い”思い”の詰まった今回のワークショップの成果により、次代の久留米大学を担う優秀な人材が多く育成されることを祈念いたしております。

私の教育観

私の教育論と学生への期待

私は昭和62年に久留米大学医学部に入学し、6年間久留米大学医学部生として学生生活を過ごしました。今回は一教室を預かる立場として、また一先輩として学生諸君に対し私の教育論と学生への期待を述べたいと思います。

私は学生時代、硬式庭球部に所属していました。練習はかなりハードでしたが、社会人として必要不

深水 圭（内科学講座腎臓内科部門 教授）

可欠な上下関係を教わり、練習や試合を通して忍耐を学びました。私が今日成長できているのも部活を通して色々な人と付き合い、人との繋がりの大切さを教えて頂いたからであろうと感謝しています。医師になると、患者さんからは“先生”と呼ばれます。学生と違い、医師には社会的責任が生じ、すべての責任を自分で負う事になります。よって学生時代か

平成27年11月4日

ら社会人としての資質を磨く努力が必要ですし、今後の医学教育の中にも積極的に取り入れていくべきと考えます。

学生諸君は将来の自身の医師像を想像したことはありますか？将来自分はどんな医師になっているだろうか、なるべきなのかなど、常に未来を意識することが重要です。“神様のカルテ”や“ドクターX”のような医師になりたい・・・でも結構。想像することにより理想の医師像が生まれます。さらに学生時代に医学の知識を十分に習得することにより、その知識を後に得た技術に生かすことができます。知識が無ければ患者を助けることはできません。加えて人とコミュニケーションをとる技術を身に着けることも重要です。社会人として、医学生として、誇り高い学生生活を過ごしてもらいたいと思います。とくに医学科5年、6年生は student doctor として患者に接します。腎臓内科では、男子学生はスラックス、革靴、ネクタイ着用としています。自分の親がどのような医師、学生に診てもらいたいかを考えれば当然ではないでしょうか？装いが不適切な医師・学生には診てもらいたくはありません。患者さんは“将来の優秀なお医者さん”として尊敬の眼差しで学生諸君に希望を抱き、教育に協力してくれています。患者さんの想いに応えるためには、まずは医学生として立派に振る舞うことが大切です。将来学生諸君が立派な医師に育つ事を多くの患者さんが期待しています。

私の教育観

私の教育観と抱負

医学教育の最も重要なことは、「人を診る」ことを徹底して教えることであると思います。放射線医学における画像診断は、ときに画像（デジタルデータ）のみで診断を行うことになってしまっていますが、そこには

現在、本学医学部カリキュラム委員会では、国際認証取得のため、学生に対して新カリキュラム作成を行っています。その中で、医学科3年における国内・海外研究室配属(Research Mind Cultivation Program; RMCP)が検討されています。私が留学時代に、オランダの医学科3年の女性2人が4か月間基礎研究を行うためにやってきました。彼女らは実験に真摯に取り組み、結果を論文にしています。さらにメルボルン大学の医学科5年生は1年間基礎研究を行い、素晴らしい成果を挙げました。医学は急速に変化しており、医療の現場では英語が当然の時代になってきました。地域医療を担う医師も含め、世界の最新医療をいち早く患者へ伝え、提供する使命があります。さらに学生時代に研究を通して病態を理解することは、将来医師としてのモチベーション向上には大変重要です。60年以上医師として仕事をする中で、2-3年の間海外留学をし、外国を満喫してもいいのではないのでしょうか？このRMCPを通じて、学生ひとりひとりにグローバルな考え方が芽生え、学生自身が未来の姿を想像し、後悔のない充実した学生生活を送ることができれば幸いです。私を含め、約1万人の久留米大学同窓会の先生方が学生諸君を見守っています。久留米大学医学部学生として自ら誇りをもって学び、諸君が将来多くの患者に尊敬される医師になることを期待しています。

藤本 公則（放射線医学講座 教授）

人としての患者が存在することを忘れてはなりません。問診や画像所見からでもその個人の悩みが理解できるような臨床体験も必要です。臨床医学は、単に記憶力ではなく、深い洞察力と応用力を身に付けること

平成27年11月4日

が重要で、そのことが認識できるような教育形態が必要です。画像診断学においては、解剖学、病理学、病態生理学との対応を重視し、実際の画像や検体を用いて実習形式で講義し、いかに各専門分野における臨床医学に貢献できるかについて理解させ、治療学では実際に患者と対面させ、病める人への献身的な気持ちの育成と愛情を持って接することを徹底させたいと思います。

他方、能動的・積極的に、また、持続性をもって学ぶためには、今まで経験していないような「知的興奮」を得ることも大切だと思います。たとえば、胸部単純撮影から得られた胸部画像の読影において、肺の辺縁と大動脈の辺縁の見え方（光輝）に違いがあり、これは視覚精神生理学的現象（optical psychophysiology phenomena）であるマッハバンド（Mach bands）のためであり、その成因は網膜における視細胞の側方抑制効果と実は精神学的要因によることが分かっています。このいわば錯覚現象を逆手に取って画像診断に応用すること、それを実際に体験することで、その体験者が画像診断に深く興味を抱いてくれることを経験しています。このような知的興奮が得られるような授業も心がけたいと思っています。

卒後教育では、久留米大学病院での研修者を増やす努力がまず必要です。魅力あるより実践的なカリキュラムの作成とより高度なチーム医療が実現できることを教え、その後も本学に残りたいと思えるような環境づくりが必要だと思います。実際には医療に携わる者の務めとして常に自己反省と精進が必要であることを理解させ、達成目標に到達する喜びを体験させることも必要だと思います。これらは実際に教育者が実践している姿を見せ、共に考えて行くことも大切です。また、臨床を通して、「知的興奮」が得られるような実践的な研究に携われるようにもしたいと考えています。

久留米大学卒業後、久留米大学に30年在籍し、医学部卒前・卒後教育に携わってきました。本学を心から愛するひとりの医師として、久留米大学の伝統ある学風、コミュニケーションを重要視した卓越した教育法を引き継ぎ、高い理想をもった豊かな人間性と幅広い知識を有し、慈愛に溢れ「人を診る」ことができる医師となるように学生を育てたいと思っています。教育の責任者としては、本教育を通して日本国の発展に寄与できるような人材育成を行うことも重要であることを深く認識するように努めたいと考えております。

◆編集後記◆

今回は7月に行われた新カリキュラムワークショップについて新カリキュラムワークショップ実行委員長の山木宏一先生（解剖学講座教授）に特集記事を執筆していただきました。また新カリキュラムワークショップに参加した内藤嘉紀先生（病理学講座講師）、三好寛明先生（病理学講座助教）、にも若手医師を代表して感想を書いていただきました。

「私の教育観」は新たに教授に就任された深水圭先生（内科学講座腎臓内科部門教授）、藤本公則先生（放射線医学講座教授）のお二人に執筆していただきました。

医学教育ニュースは久留米大学医学部医学科のホームページ（http://med.kurume-u.ac.jp/medical_news/index.html）にてご覧いただけます。皆様方のさまざまなご意見等を広報活動委員会までいただければ幸いです。

編集責任者：杉田 保雄